第３　問題作成部会の見解

１　出題教科・科目の問題作成の方針（再掲）

○　「公共」は，人間と社会の在り方についての見方・考え方を働かせ，現実社会の諸課題の解決に向け，選択・判断の手掛かりとなる考え方や公共的な空間における基本的原理を活用して，多面的・多角的に考察したり構想したりする過程を重視する。

基礎的・基本的な概念や理論，考え方等を活用し，文章や資料を的確に読み解きながら考察する力を求める。

問題の作成に当たっては，現実社会の諸課題について理解したり考察したりするために必要な概念や知識に関わる問題，多様な資料を用いて考察する問題などを含めて検討する。

○　「倫理」は，人間としての在り方生き方についての見方・考え方を働かせ，現代の倫理的諸課題を見いだし，その解決に向け，多面的・多角的に考察したり，公正に判断し構想したりする過程を重視する。

「公共」での学習などを踏まえ，倫理に関する概念や理論についての理解を深め，それらを活用して，考察する力を求める。

問題の作成に当たっては，倫理的課題の解決に向け，先哲の思想に関する原典など多様な資料や他者との対話等を手掛かりにして，批判的に吟味して思索を深めたり，様々な立場から考察したりする問題などを含めて検討する。

２　各問題の出題意図と解答結果

第１問　『地理総合／歴史総合／公共』の「公共」第１問と同じ。

第２問　『地理総合／歴史総合／公共』の「公共」第４問と同じ。

第３問　「美」に関する源流思想及び近現代思想についての課題探究をとおして，「美」に関連する知識の定着度，及び倫理的課題についての思考力を測ることを狙って作問した。あわせて，美とは何かについて考えさせ，資料読解と会話による議論を通じて思考力・判断力を深めてもらうことを目論んだ。第３問全体の得点率は58％ほどであり，理想的な点数であった。内訳をみると，知識を問う設問の正答率は低かったが，資料を用いて読解力を問う設問の正答率は高かった。しかし，どの設問も高い識別力を有しており，設問としては有効であった。今後も，知識を問う問題と思考力を問う問題のバランス及び難易度を維持することが必要であると思われる。

問１では，古代ギリシアの複数の思想家のそれぞれが，美についてどのような考え方をしているかについて理解しているかどうかを問うた。哲学者のみならず叙事詩人についても選択肢に含めたためか，その分，難易度が上がったようである。問２では，宗教美術とその背景にある思想についての基本的な知識を問うた。正誤のポイントは教科書知識の範囲内であったが，やや難問となった。ただし，識別力は高く，特に最上位層の識別ができている。問３では，アウグスティヌスについての思想史的知識と，資料を読解する能力を問うた。受験者の解答の傾向から，思想史的知識の正確な理解を問う出題の狙いに則した結果となった。正答率，識別力は想定通りであった。問４では，中国思想における美の考え方について，礼楽をめぐる思想を中心に，その知識と判断力を問うた。正答率はやや高くなった。今後は中国思想についても，分野横断的な問いを工夫することで難易度を高めることが課題となる。問５では，大乗仏教の基本思想について，インド・中国・日本にまたがる仕方で，知識と判断力を問うた。従来の傾向から外れた内容を含むため，予測通り正答率は低めになったものの，解答の分布では理想的な結果が出た。全体の難易

度調整の上で効果的な設問であった。問６では，西洋の近世から近代における人間観，自然観，宗教観，芸術観の展開についての知識を問うた。正答率は高く，やや易であったが，識別力は高く，特に最下位層から中位層にかけての識別ができている。問７では，資料から芸術作品と複製技術の関係性について理解を求めた。ベンヤミンは教科書記述が少ないため，資料から論理的思考力で正答を求める問題だが，正確に資料を読み取っている受験生が多く，正答率の高い問題となった。問８では，資料の正確な読解をとおして，芸術による美的体験が鑑賞者の生き方に何をもたらすかを問うた。正答率は比較的高かったが，これは予想通りであった。問９では，対話文全体の読解力と，西洋近代の思想家についての知識とを問うた。

第４問　新課程学習指導要領に即した試験の初年度ということで，「国際社会に生きる日本人としての自覚」の核のひとつになっている「外来思想の受容」をテーマに設定した。高校生と大学院生の会話をとおして日本における外来思想・文物の受容の歴史とその特徴を概観し，日本思想がいかに形成されてきたか，また，グローバル化が進んだ時代において外来思想・文物といかに対するべきかを考えてもらうことを狙いとした。時代や分野のバランス，文章量も無理がないよう配慮したことについては，成功したと思われる。また，応用力を問う大問５・６とは異なり，教科書の知識が定着しているかを判断できるよう意識して出題した。

問１は，日本における神々への信仰と，仏教や儒教といった外来思想との関係を問うた。やや難問だったが，既得知識の定着を適切に測ることができているという評価だった。問２は，現代の高校生が宗教に対して抱いた疑問をきっかけにした発表という場面設定とした。『歎異抄』のうち，教科書には取り上げられていない部分の紹介にもなっている。教科書を正確に理解していれば解答できる平易な問題となっており，正答率も妥当なものとなった。問３は，江戸時代の思想家が，外来の思想文化に示した対応を正しく理解しているかを，思想家相互の差異を分析する能力とともに，確認しようとするものであった。正答率・識別力ともに妥当であったが，知識問の性格が強かったので，思考力を問う要素を加える工夫が求められる。問４は，西村茂樹『日本道徳論』の一部を要約した資料を挙げて，その論理展開を正しく把握できるかを問うものである。思想家の言説であるので，単なる国語的読み取り問題ではないと考えていたが，正答率が高いだけでなく，識別力にも乏しかった。論理的分析だけでなく，知識問的要素を含ませる事が今後の課題である。問５は，高校生のレポートという形式で，テーマのまとめをした。比較的平易な知識問題だが，正答率は低かった。丸山眞男「雑居」の教科書記述が少ないことが原因との指摘があったが，それ以外の空欄がわかれば正解できるので，夏目漱石と内村鑑三の思想も受験生には十分定着していないと考えられる。

第５問　認知バイアスとクリティカル・シンキングをめぐる生徒と教師の会話及びそれに関連する問題をとおして，記憶を始め認知バイアスの働く様々な場面や，認知バイアスに対処する工夫・装置としての批判的思考や科学的方法論について考えさせた。また，学んだ知識を踏まえて，様々な社会問題の解決について，多面的な考え方がありうることを提示しつつ，多角的に考察し，公正に判断させることを目指した。

問１は，会話文と心理学実験の内容・結果を読み取る力（技術）を問うとともに，記憶の仕組みについての基本的知識を問うものだった。短期記憶と長期記憶についての解説は多くの教科書にあったが，正答率は低かった。認知心理学は，新課程で新たに取り上げられた重要な心理学の分野である。問２は，会話文中の具体的な事例を読み，様々な認知バイアスの説明から，それぞれの事例に対応するものを適切に選択する判断力を問うものだったが，正答率は高かった。より

思考力を問う出題形式にする必要があろう。問３は，先哲の思想についての知識，及びクリティカル・シンキングの基本概念についての知識を問うとともに，先哲の思想がどう応用されるかについての思考力・判断力を問う問題であった。問題そのものは分野横断的であり，新課程の方針に沿うものだったが，正答率は 30%未満に止まり，識別力は低かった。問４は，治験の仕組みについての説明を読み取る力（技術），及びその仕組みがどのような認知バイアスへの対処を意図しているかを考える思考力を問う出題であった。成績上位層は正答を確実に選んでおり，良問との評価を受けた。問５は，災害時における避難行動を取り上げ，学んだ知識を踏まえて，どのように対処するかについては多面的・多角的な考え方があり，単純にどれかが正解というわけではないことへの認識を促す意図で作成した。複雑な出題形式であったが，結果を見ると適切な難易度であったと考えられる。

第６問　生徒が戦争と平和の問題に関心を抱き，「平和の実現のために必要なこと」をテーマに探求する対話を行う場面設定で，平和を目指した様々な取り組みについて理解しているかを問うとともに平和を阻害する要因について倫理的課題を見出し，その解決に向けて倫理に関する概念や理論を手掛かりとして多面的・多角的に考察し，公正に判断して構想できるかを問う内容とした。第６問全体の得点率は 58.51％であり，知識問題と思考問題を織り交ぜながら，受験生の倫理の学習成果を総合的に問うものとして，狙い通りの大問となった。

問１は，非暴力思想・平和主義を唱えた様々な思想家の取り組みに関する知識を問う問題であった。正答率・識別力とも妥当であった。問２は，フーコーの権力論に関する知識を問いながら，会話文中の人物の発言を解釈し，その内容との整合性について推理させることで，正確な知識と論理的な思考を問う問題だった。正答率は 63.93％，識別力も認められ，狙い通りの設問となった。問３は，ストア派の平等思想と現代の「人間の安全保障」の二つに関して既知の知識を踏まえ，現代の「コスモポリタニズム」を推察する問題であった。正答率は 26.50%と低かったが，識別力は認められた。問４は，フランクルの思想を正確に把握し，その思想を今日の日常的な事例に応用し，問題を発見していく判断力を問う問題であった。正答率は 90.50%である。思考問題であるが故に誤答マークを明確にする必要があったため，難易度が低くなったと受け止めている。問５は，シャープの資料を読解し，その思想がどのような形で行動や運動として具体化されうるかを判断する設問である。正答率は 67.18%であり，標準的な難易度となった。思想や思考を行動や運動へと具現化して考えさせる趣旨はおおむね成功したと考えられる。

３　自己評価及び出題に対する反響・意見についての見解

第１問と第２問については，『地理総合／歴史総合／公共』の「公共」部分を参照。

新課程の問題作成方針に沿って，教科書の基礎的な知識を問いつつ，併せて読解力や多角的・多面的な思考力と判断力を問う中で，高校生が主体的に問題を発見し，広く深く考えることができるような作問を心掛けた。そのために，リード文に代わる会話の場面を工夫し，知識に関しては時代と地域にまたがる横断的な設問を作り，教科書記載のない原典等の資料を積極的に取り上げた。大問で取り上げたテーマは，第３問の美や芸術と美的経験，第４問の外来思想，第５問の認知バイアス，第６問の戦争と平和であった。いずれも意欲的な課題を取り上げ，そこに多少なりともメッセージ性を込めた。難易度は全体として標準を目指した。

新課程になって初めての共通テストであったが，結果や反響から見てまずまずの出来であったと考えている。高等学校教員からも，テーマ設定，作問の狙い，難易度，表現など，全体として高評価を頂いた。特に美や芸術，美的経験を取り上げたことは評価された。

今回の倫理の問題の成否は，新課程の新機軸となった第５問並びに第６問に掛かっていた。そのうち特に第５問に言及すると，旧課程の教科書でほとんど取り上げられていない認知心理学を重視し，心理学実験の読み取りや，記憶に関する基本的知識，古典の知識とテーマを関連付ける横断的な設問，立場を選んだ上で理由・反論を対応させる問題を工夫した。今後も偏りには留意しつつ大問毎の統一テーマを設定したいと考える。第６問についても同様である。

改善点を二つ挙げる。まず，四つの大問の全体に関して分量がやや多めであったことに関しては，読ませる資料を絞ることで，受験生にじっくり考えさせる余裕を確保する必要がある。次に，知識問題の方の正答率が低く，読解問題の方が高い傾向が見られたことに関しては，前者の学習が不足し，後者が国語問題となって教科書を読まなくても解けたためと考えられ，今後は知識問題を織り込んだ思考問題を作る工夫が求められる。

４　ま　と　め

第１問と第２問については，『地理総合／歴史総合／公共』の「公共」部分を参照。

今回は新課程学習指導要領に沿った初めての作問であり，六つの大問すべてに渡って試行錯誤を繰り返したため，多大な労力を費やした。とりわけ，「公共」に関わる部分については，科目としても新たに導入されたものなので，苦心を重ねて作問した。幸い，結果として，狙い通りとはいえないまでも，全体としてまずまずの出来の作問になった。今後は今回の作問の傾向とパターンが作問の基準となると考えるが，そのためは，基本的知識と組み合わせた思考力・判断力を問う設問の工夫や，異なる立場を反映させた複雑な設問方式の練度，偏りを避けつつメッセージ性を込めた意欲的なテーマ設定等，更なる工夫が求められる。